

謡曲「仏原」考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23726

謡曲「仏原」考

藤島秀隆

藩政初期の加賀藩の能楽は金春流が主であったが、五代藩主前田綱紀の時代になると、宝生流の保護と奨励政策によって、加賀宝生の伝統の基礎が確立され、以後の藩内の能楽は宝生流一本に統一注1され現在に及んでいる。この結果、

石川県の能楽は「加賀宝生の世界」と評されている。

しかしながら、加賀・能登を舞台とする能の各流現行曲注2目を瞥見すると、「実盛」「安宅」「歌占」の三曲は観世・宝生・金春・金剛・喜多・梅若の六流とも現行曲として挙げてある。これらに比べて、「鶴祭」は金春流だけであり、また、「仏原」は観世・金剛・喜多・梅若諸流の現行曲である。

何故に宝生流では上演されないのであろうか。

例えば、藩政時代の宝永元年（一七〇四）四月朔日に催

された金沢「卯辰観音院神事能」の演目を見ると、「仏原、諸橋権之進」とあって加賀藩の能大夫が舞っているのである。従って、少なくとも藩政時代に「仏原」が演能されていた証左と言えるであろう。

ところで、宝生流においては、明治二十六年（一八九三）宗家の奥付をもった謡本の改訂版を刊行したときに、宝生宗家の宝生九郎智英が内百番外百十番、内外合せて二百十番のうち、「仏原」を含む三十番を廃曲注4としたのである。宝生宗家の廃曲の理由は不詳であるが、能楽愛好者にとつて極めて不本意な措置と言えるのではあるまいか。

さて、謡曲「仏原」は鬘物（三番目物）であり、複式夢幻能である。「能本作者註文」（大永四年へ一五二四）吉忠蔵人兼將編）、『二百拾番謡目録』いろいろは作者註文『歌謡作者

考』『自家伝抄』等の作者付はいずれも世阿弥の作とする。

本曲の作者について、かつて能勢朝次氏は、「作者付の上から信すべきものと思はれ、又、作品の上から考へても、世阿弥作と推定して差支えないと思はれる曲」として、「仏原」を挙げておられる。しかし、世阿弥自身の手になる『三道』『申楽談儀』『五音』といった伝書に記されている世阿弥の作品と考えられる曲名の中に「仏原」は見えない。従つて、根本資料に拠る確証が得られないのであるから、「仏原」を世阿弥の作と断定することに不安がある。

『春日拝殿方諸日記』^{注6}宝徳四年（一四五二）二月十三日の条によると、薪猿楽に観世大夫が「仏原」を演能したことが見える。この記録が現在のところ、「仏原」が最も古く演能されたであろうと推定し得る年代を示している。しかし、右に掲げた演能年の十年前、すなわち、嘉吉三年（一四四三）八月に世阿弥は八十一歳で没しているのである。本曲の成立時期について、田中允氏は「謡曲曲名総覧」において「仏原」（仏御前）は、室町時代成立と確定し得る曲と明示しておられる。

二

次に観世流『元和卯日本謡曲百番』^{注8}所収の詞章に拠つて、本曲の梗概を辿つてみよう。

〈前場〉 都方から来た旅僧（ワキ）と徒僧（ワキツレ）が白山禪定を思い立って白山麓を訪れる。ある夕暮れ、加賀の国仏原の草堂に立ち寄り一夜過ごそうとする。そのとき、仏御前の幽霊が里の女（前シテ）の姿で現れる。

シテ「是は此仏原にすむ女にて候。時もこそあれ今宵しも、此草堂に御とまりこそ、有難き機縁にてまします」けふは思ふ日にあたれり、御経をよみ仏事をなしてたび給へ。小さなきだに五障三従の此身なれば、まよひの雲も晴がたき、ころの水の濁りをすまして、涼しき道に引導し給へ。

前シテは仏御前の命日だから供養して欲しいと旅僧に依頼する。亡者（仏御前）は加賀国出身の白拍子で、舞女の誉れ世に勝れたが後には故郷に帰り草堂の露と消えたといふのである。

〈後場〉 夜になると旅僧の夢に仏御前（後シテ）が白拍子姿で現れる。

ワキ「ふしぎやな仏の原の草まくらに、遊女の影の見え給ふは、如何様き、つる仏御前の、幽霊にてぞましますらむ。

シテ詞「はづかしながらいにしへの、仏といはれし名をたよりにて、輪廻のすがたも歌舞をなす。

御仏前は舞を舞つて世の無常のさまを述べて消え失せる

のである。

本曲について佐成謙太郎氏は「大体に於てよく纏まった脚色で、髪物としては珍しい妄執の苦を訴へることのない、すがすがしい幽艶な曲柄をなしてゐる」と批評しておられる。

本曲の素材は、内容としては『平家物語』（巻第一）「祇王」あるいは『源平盛衰記』（巻第十七）「祇王祇女仏の前の事」に依拠してはいるが、詞章としては原文からの引用は少なく、むしろほとんど原文を採りあげていないと言ふべきであろう。作者は都で往生した仏御前を作り替へて、故郷に帰った仏御前を描いている。それに行き逢う者として白山禪定の旅僧をからませているのである。

春田宣博士は「仏原」の内容は、「世阿弥の全くの創作だとばかりはいえず、別の、仏側を主にした伝承をふまえて作られている」と推測されておられる。更に、『満濟准后日記』応永二十一年（一四一四）五月十一日の条の、

齋藤別当真盛靈於加州篠原出現、逢遊行上人、受十念云々。去三月十一日事歟。卒都婆銘令一見了。実事ナラハ希代事也。

とある記事を世阿弥が見るか、この話を伝え聞き巧みにとり入れて行つたと指摘注40しておられる。

管見によると、世阿弥が加賀国内を旅行したという確証は全くない。しかし、「仏原」を仏御前の出生地とした構成は、『源平盛衰記』に見える「仏が原（後述）」に拠つたものと考えられる。

仮りに本曲の作者を世阿弥と想定した場合、「実盛」（世阿弥作）の詞章との関連が認められる。例えば、『一遍上人語録』に収載されている、

○ひとりただほとけの御名やたどるらんをのくかへる
法の場人（日本思想大系本による）

という歌が、語句を少し改め、意味を変えて「実盛」と「仏原」に引用されていることは夙に金井清光氏によつて指摘注41せられている。当該部を挙げると、遊行上人（ワキ）の説法の語句として「独りなほ仏の御名を尋ね見ん、仏の御名を尋ね見ん、おのおの帰る法の場」（「実盛」と見え、「仏原」では里女（シテ）が「ひとりなほ仏の御名を尋ね見ん、おのおの帰る法の場人、法の場人の」と謡う。その他の詞章の類似としては、「心の水の濁りを澄まして、涼しき道に引導し給へ」（「仏原」）、「心の水の底清く濁りを残し給ふなよ」（「実盛」）、「輪廻の姿も歌舞をなす、極楽世界の御法の声」（「仏原」）、「極楽世界に入りぬれば、永く苦界を越え

行きて、輪廻の古里隔たりぬ」（「実盛」）などが注意される。詞句の類似という点のみで推定すれば、「仏原」の作者（世阿弥か）は、「実盛」を契機として、「仏原」を作成したと言えよう。両曲は相関関係にあると考える。

次に、「仏原」の前半部と末尾部のくだりが巷間に伝承されていた説に基づいて構成されたと想定した場合、平家語りの座頭が加賀地方を巡業し、その地で採録した仏御前の伝承を都にもたらしたとする。その話を作者が入手して「仏原」を作ったと推測することができる。例えば、権大外記中原康富の日記『康富記』^{注12}嘉吉三年（一四四三）四月二十七日の条には、

教一座頭語平家了、此教一座頭来月四日五ツ比可下向北国能登越中之由申、仍越前加賀等路次縁状共所望之間、予令申請方、十通許取与之、米秋可上洛云々。

と記している。これは教一座頭が地方巡業（越前・加賀方面）のために必要な紹介状を康富に乞い願ったので与えたという記事である。この嘉吉三年八月に世阿弥は没しているから右の記事の平家語りと世阿弥とは直接の関係はない。

しかし、かなりの平家語りの座頭が、北陸地方へ商売または布教のため巡業し、かの地の伝承を聴取して都人にもたらすという伝播者の役割を果たしていたことは、十分に

考えられることである。

さて、仏御前（幽霊）を回向する者が白山禅定の旅僧と設定したのは、能の「善知鳥」における諸国一見の僧が立山禅定する構成と対蹠させるためであったと考える。周知の如く、立山・白山・富士山は三禅定^{注13}と言われている。三禅定にちなんで白山禅定を設定したものと思われる。立山地獄に対する白山麓の秋風寒き仏の原を配し、立山における男性（男性美）と白山における女性（女性美）という対比を見せていると言えよう。

三

「仏御前」は加賀国能美郡中海村大字原（現、小松市原町）の出身で、「原」が伝承のある地と伝えられている。「仏原」の舞台が加賀の国仏の原である。国鉄北陸本線小松駅前から小松バスの原、上麦口、中の峠方面行きに乗車すると、所要時間約二十五分で鄙びた山里の原の集落に到着する。主要地方道小松下吉野線にはほぼ平行して、梯川の支流湊上川が中央の山間を西北に流れている。原町の集落西北端の県道沿いには、小松市指定文化財の三基の墓石がひっそりと建ち、そのあたりは御前様屋敷と呼ばれた屋敷跡（庵

跡」と伝えられている。また、近辺の阿稜山麓の杉林の中にも五輪塔があり、そこは仏御前を茶毗に付した地と伝えられている。

元禄十四年（一七〇一）の「郷村名義抄」^{注14}によると、村名の交遷等について、

能美郡原村、往古は野里村と申由、然所平清盛寵愛之白拍子仏と申女遁世之後、古郷石川郡中林村之者に付尋下り候処、此村領之内畠之字に中林と申所有之候故、此所と存庵室を建罷在相果候故、往古は仏原村と申由申伝候へ共、何比より原村と迄罷成候哉相知不申候由。又一説には、右仏と申女此村之者にて、此所へ立滞居住仕とも申伝候。正保・寛文・貞享高辻帳に、原村と御座候。

と記している。往古「原」は能美郡輕海郷に属していたが、『源平盛衰記』（巻第四）安元三年（一一七七）の「白山神興登山の事」の条によると、「二月六日は仏が原、金劔の宮へ入れ奉る」と見え、更に、文明十八年（一四八六）の道興准後の著『廻国雜記』には、

ほとけの原といへる所を過侍るとぞ

わがたのむ仏の原に分けてぞ

行ふ道のかひもしらる、

と詠まれている所である。一方、世阿弥作と伝えられる謡曲『仏原』には、ワキ「急ぎ候程に。これははや加賀の国仏の原とやらん申し候」とあり、また、後場において都方

の僧らが「松風寒きこの原の。松風寒きこの原の」とも謡っている。（以上、傍線は筆者による）。

かように諸資料を繙くと、「原」村の前は「仏の原」^{注14}（または「仏が原」）であったと推測される。いつしか「仏の原」が縮約されて「原」という地名に落着いたものと考えられる。例えば、『朝倉始末記』一（『賀越閼諍記』一）享禄四年（一五三二）十一月二日の条に「明日ハ原・麦口・山内ヲ攻候ベシ」（傍線筆者、日本思想大系本による）と見え、ここでは「原」と記されている。

一方、「仏原」という地名は越前国（福井県）にも存する。近世において百井塘雨の著『笈埃隨筆』^{注15}によると、「仏御前出生の地は加賀の国といへれど、今越前地に仏原といふ所也と、則寺あり、仏原山月窓寺といふ」と記している。明和九年（一七七二）四月刊の俳人犬井貞恕の著『謡曲拾葉抄』^{注16}所載の「仏原」にも「仏の原は今越前にあり、仏原月窓寺と号す。本尊阿弥陀也、彼白拍子仏の原より出たる人なれば仏御前とは云也」と注釈されている。右の所伝を承けて、『阪谷五箇村誌』『大野のあゆみ』^{注17}等も仏御前は仏原柝沢^{注18}の出生であると記している。この越前の仏原と加賀の仏原とは、現在の国道で表すと一五七・一五八号線で結ばれ

ている。女語りによる伝承の道と言えようが、既に越前の
仏原（現、大野市仏原地区）が九頭竜川の電源開発ダム（仏
原ダム）によって水没したために、伝承を調査し、知るよ
すがもない。しかし、かつて越前の月窓寺に仏御前にまつ
わる所伝が存したことは極めて注目し値すると言えよう。

四

さて、加賀の仏原の近くに、往昔国府（現小松市古府町）
があったと伝える。そこは梯川の中流の地に構築されてい
たという。安元二年（一一七六）国司師高の弟、加賀国の
目代近藤判官師経の惹起した鶴川事件の涌泉寺（現在は遊
泉寺）は白山中宮八院の一つであった。このとき、白山衆
徒の大集団が佐羅宮の早松（白山七社の一）の神輿を擁し
て三坂峠を越え、仏原を通り、加賀の国府へ向かったので
ある。従って、国府→仏原→三坂峠→白山末社の別宮、更
に白山頂上の御前峰へ登る。あるいは加賀馬場の中心であ
る白山本宮（その後身は現在の白山比咩神社、石川郡鶴来
町）へと通ずる道が白山禪定道といわれている。この道は
藩政時代には巡見使道でもあった。下出積與氏の推定路線
によると、中世末までの加賀馬場の禪定道は、白山本宮を

発して↓吉野・佐羅（現在の佐良）を経↓瀬戸野↓箭笠中
宮↓駕籠の渡↓檜新宮↓美女坂↓雨池↓北竜ヶ馬場↓御手
水鉢↓大汝峰↓最後に主峰の御前峰（二七〇メートル）
に登拝する。白山の北側を登るといふコースを試見として
提示しておられる。誠に正鵠を射たご見解である。

ところで、前掲の二か所の仏原を結ぶ仏御前の伝承の道
は、推測すると、京より美濃路（恐らく越前街道、現在の
国道一五六号線）を通り、油坂峠を越え、越前の仏原、勝
山（ここには越前馬場の白山中宮平泉寺が鎮座）を経て、谷
峠を越え、木滑・別宮・三坂峠・加賀の仏原に至るコース
ということになる。

本曲の作者は、恐らく京都と越前・加賀を結ぶ右の如き
交通路の存在を知っていたと考えられる。更に、白山の主
峰御前峰へ登ることを禪定と言い、その登山路を禪定道と
称することも熟知していたと推断しても過言ではあるまい。

一方、加賀地方の最大の都国府の所在地の近鄙に仏原が
位置していたことは、白拍子が出現しても何ら不思議では
ないと思われる。例えば、室町時代において、加賀出身の
遊女を「加賀女」といい、その音曲を「加賀節」と称して
いたのである。芸能人を生み出す土壌は培われていたと言

える。仏御前の帰郷説話と郷里の草庵で一生涯を終えたといえる伝承には、物語を運搬した北陸出身の遊女が存在し、ひょっとしたら仏御前と名乗って廻国していたのかも知れない。本曲の作者は女語りの伝承を採集したのではあるまいか。

注1 下出積與氏著『石川県の歴史』時和45年7月、山川出版社刊

参照。

注2 野上豊一郎氏編『註解謡曲全集』巻一序説（昭和46年7月、中央公論社刊）による。以下、引用本文は巻二による。

注3・4 梶井幸代、密田良二両氏著『金沢の能楽』昭和47年6月、北国出版社刊参看。

注5 「謡曲と作者」（『綜合新訂版能楽全書』第三巻所収、昭和55年5月東京創元社刊）による。

注6 『続群書類従』第二輯下、昭和50年2月続群書類従完成会刊所収。

注7 前掲『能楽全書』第三巻参照。

注8 後藤淑氏他編、笠間選書70、昭和52年9月、笠間書院刊所収による。以下引用本文は同じ。

注9 『謡曲大観』第四巻、昭和6年2月明治書院刊所収「仏原」を参照。

注10 『中世説話文学論序説』所収「祇王」の一考察（その一）、昭和50年4月桜楓社刊による。

注11 「世阿と修羅能」「実盛」について『国文学』解釈と鑑賞、昭和52年2月至文堂刊所収）。

注12 引用は増補史料大成「康富記」一（昭和50年9月臨川書店刊）所収本文による。

注13 国文註釈全書第六巻所収『謡曲拾葉抄』昭和43年3月、すみや書房刊参照。

注14 森田柿園（平次）著『加賀志徴』上編昭和44年9月復刻、石川県図書館協会刊による。

注15 引用は日本随筆大成（第二期）12、昭和49年6月吉川弘文館所収の本文による。

注16 引用は注13『前掲書』による。『謡曲拾葉抄』の著者が何故に越前仏原の月窓寺の伝承を採録したのか明白でない。加賀仏原の伝承より一時期越前の仏原の方が伝播していたのかも知れない。月窓寺は今ほ地中深く礎石を残すだけという。現在、付近には仏御前の滝と呼ばれる滝がある。

注17 杉原丈夫氏編『越前若狭の伝説』昭和45年2月、松見文庫刊参照。大野市教育委員会編『大野のあゆみ』昭和43年8月大野市役所刊など参看。

注18 高瀬重雄氏編『白山・立山と北陸修験道』所収「泰澄伝承と白山信仰」、昭和52年9月名著出版刊による。

（金沢工業大学教授）

〈付記〉 本稿は「説話・物語論集」第六号所載の拙稿「仏御前説話攷」—加賀国の伝承—（二）、謡曲「仏原」をめぐっての）のみを採りあげ、改稿し、補填を加えたものである。

— 昭56・7・受理 —